

『健康格差社会—何が心と健康を蝕むのか』

近藤克則著、医学書院、2005年

おやさと研究所講師

八木 三郎 Saburo Yagi

人類の長い歴史のなかで「長寿」は、万人の共通の悲願である。その長寿を医学の進歩や生活の豊かさによってある程度可能になった今、わが国は世界第一位の長寿国となった。とりわけ、近年急速に進歩する医学、医療の恩恵に浴し、そのなか人々の健康志向はますます強くなり、病気の予防を目標とする健康づくり運動はあらゆる面で推進されている。

しかし、いっぽうでは、加齢による身体機能の低下や時として疾病や障害に見舞われることも稀有ではなく、そのことによって日常生活上での介護や認知症の問題が生起している。健康に老いることは、すべての人々の願いであるにもかかわらず、現実にはその長寿の側面にある様々な問題と直面し、その問題解決の手立てを模索している状況がわが国には存在する。

本書は、そのわが国の長寿化を社会政策の視座で分析し、近年の新自由主義的な構造改革によってもたらされる二極分化する「勝ち組」「負け組」といった格差社会が招くもの、その一つが健康被害であり、年齢、性別、所得に関係なく健康被害をもたらす事実を伝えている。それはとりもなおさず、健康不平等をうみだす原因になっていることを警鐘しているのである。

それについて著者は具体的に三つのポイントを挙げています。一つは、健康面での「格差社会」がなぜ生起するのか。そのプロセスについての理論仮説として「生き抜く力」や「相対所得仮説」、「ソーシャル・キャピタル」等を論じている。これにより、近年のわが国の格差社会が、人々に慢性的あるいは普遍的となる社会的・心理的ストレスを生じさせ、その影響が「勝ち組」「負け組」を問わず、すべての人々の健康に悪影響を及ぼす危険性を指摘している。

二つ目は、健康づくりや介護予防に携わる人々に向けて、その戦略（ストラテジー）の見直しを提起しているのである。2000年にスタートしたわが国の介護保険制度は5年ごとにその見直しが行われている。それにより現在、脚光を浴びている介護予防プログラムや健康教育・指導が危険（リスク）因子をもつ個人に介入するハイリスク・ストラテジーに基づくものを中心となっている事例を挙げています。その取り組みの有効性を示すエビデンスは意外なほど乏しいことを理論的に示し、このハイリスク・ストラテジーに偏重した取り組みがほとんど無力であることを論じています。

三つ目には、従来の「生物・医学 (bio-medical) モデル」の限界に言及している。人間を生物としてとらえ、健康についても遺伝子や行動など、その生物学的な側面から説明することで医学は大きく進歩したが、しかしそれは、人間の一面をとらえているに過ぎず、今後はすべての領域で「生物・心理・社会 (biopsychosocial) モデル」への転換が不可欠であると提起している。社会疫学 (social epidemiology) —健康を規定する社会的な因子 (social determinants of health) を研究する疫学の一部野—で蓄積されてきた科学的な研究成果に基づき、なぜ社会経済的な因子が身体的な健康に影響を及ぼすのか、そのプロセスについての理論仮説を提示している。

その説によると、社会経済的な慢性ストレスが「生き抜く力」を蝕み、それによって、「うつ」に代表される精神的な不健康

を招きやすくなること。そのことが交感神経優位の身体環境となって、精神的に常にハラハラ・ドキドキし、ストレスホルモンの過剰分泌など内分泌学的プロセス、さらには免疫学的な面での抵抗力の抑制など、いくつかの生物学的な経路を通じて身体的な不健康を強いられると論じている。

具体的には、愛知県内の15の自治体で32,891

人の高齢者を対象とした著者の研究調査から、社会経済格差の拡大によって最高所得層と最低所得層では抑うつ状態の人の割合が、女性で4.1倍、男性で6.9倍の差があることを報告している。

また一方、健康的で居心地のよい社会となるためにはどんな条件、要素が不可欠なのか、その成就には何が課題なのかを考察している。格差拡大社会が「負け組」だけでなく、「勝ち組」も含めた多くの人々の健康を損なうものであり、それによって失われるものは大きい。「科学的合理性」だけに固執せず「社会的合理性」が合わせて発揮される社会を構築することが急務であると本書は熱く語りかけている。

主な内容は以下の通りである。

序

- I 社会と心と体
 - 1. 健康格差社会・何が心と健康を蝕むのか
 - 2. 生活習慣病対策と介護予防はなぜ難しい？
 - II 社会・人間関係と健康
 - 3. 生物・医学モデルを超えて—パラダイムとは何か
 - 4. 上位層は健康で、底辺層は不健康！？
—社会経済状態と健康—
 - 5. なぜ結婚や友達は健康によいのか—人間関係と健康
 - III 社会と健康をつなぐもの—心の大切さ—
 - 6. なぜ学歴・職業・所得 (社会経済的因子) が健康に影響するのか
 - 7. うつの心は風邪か—抑うつの重要性
 - 8. 「病は気から」はどこまで実証されているのか
—主観的健康観・心理・認知の重要性—
 - 9. ポジティブな「生き抜く力」は命を救う
—ストレス対処能力—
 - IV 社会のありようと健康
 - 10. 人はまわりと比べて生きている—相対所得仮説
 - 11. コミュニティの力、再発見！
—ソーシャル・キャピタル—
 - 12. 介入すべきは個人か社会か
—ハイリスク・ストラテジーの限界—
 - V 社会と健康をめぐる課題
 - 13. 基礎科学としての社会疫学の課題
 - 14. 「健康によい社会政策」を考えよう
- 終章 社会疫学
—社会のための科学・21世紀のための科学—



なお、本書は2006年6月に第12回社会政策学会賞(奨励賞)を受賞している。ぜひ、ご一読を。